

FGo思いついてしまっただけのネタ作品

赤 有馬

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

万札溶かしたり、引いたり、オケアノスに歓喜したりした末に生まれてしまったネタ。

基本的に時間が無いので講義の時間の間を縫って書いてくスタイル。内容と速度には一切の期待をなさらぬよう。

※作者が金を溶かしても手に入っていないキャラも出すため口調等がおかしな場合があります。

目次

日常	1
ふゆき	5
ふゆきとその遺産	10
：	14

日常

・《起床》

「先輩、先輩起きてください」
マシユの声がする……。

恐らく起床時間……なのだろう……。

……起き……スヤア……

「起きないと……」

……Z z z z

……Z z z z……

「清姫さんを焚き付けます」

「はい！ 起きました！」

壁「ミサツ!! へチツ!!

・《朝食その1》

食堂にて

「おはよー」

「おはよう、やっと目を覚ましたのかマスター。」

挨拶を返すのは紅いアーチャー通称紅茶のエミヤ。食堂を取り仕切っている。

その姿は……。

いつもの紅い礼装に割烹着。

「なるほど今日は和食か」

「何故わかった？」

鏡見なさい。

・《朝食その2》

「さーて空いてる席は……」

・テーブル1 (ギルガメツシユ, ヴラド三世, アルテラ) 空き1

・テーブル3 (アーサー, アーサー (オルタ), アーサー (リリイ))
空き1

・テーブル456 (レオニダス一世, スパルタクス, ヘラクレス, 呂布, ダレイオス三世, エイリーク) 空き2

・テーブル8 (ジル・ド・レエ 術, シヤルルIIアンリ・サンソン)
空き2

・テーブル10 (清姫, エリザベート・バートリー, メドゥーサ) 空き1

〈さあ……。 えらべ

(テーブル1はまず近づけない。テーブル3は……入っちゃダメだろ。テーブル……いや論外、筋肉の群れに囲まれるような趣味はない!! テーブル8イツ…精神汚染で却下……。 テーブル10……食われるのは俺、あと料理が禍々しい……。 どうする、どうする俺、何処に行けば……)

ザワツザワツ……

「よし、部屋で食うか!」

・《まいるーむ その1》

「女、ローマ、世界。全て私の愛するものだ」

「好きなもの? 勿論余だ! オリンピアの華だからな」

「ローマこそ世界であり、世界こそローマである」

「お前は……ローマだ。お前も……ローマなのだな……?」

「よし、^{マスター}テメエら俺と会話をしようという心と考えはよく解った……」

「だがなあツ、時と場合は選べよ!! あと人数!!」

現在パンツ一丁、正座でありがたいローマ講義である。
着替え中の出来事である。

……寒い。

・《まいるーむ その2》

「なんやかんや言っただいぶサーヴァントも増えたよなあ」

自室のテーブル、棚、ベッド周りを見るとそう思う。

サーヴァントからプレゼントとして貰い、飾つてあるものが初期よりも増えていた。

まずはテーブル上。

例えばこの猫のぬいぐるみ、タマモキヤットから貰ったものだ。

手触りもポップとしていて柔らかい。

「けど盗聴器ついてるからアウトっ」と

そつと近くに置いたダンボールに放る。

他にも竹細工の小物入れ、高級感のあるつややかな竹で出来ていて竹の香りも素晴らしい。

清姫が作ってくれたらしい。

「けど盗撮器が竹の節目に仕込んであるからアウトっ」と

そつと竹の節に礼装ガチャで引いた赤の黒鍵を刺し入れる。

鍊金で現金を溶かして手に入れた聖晶石で引いただけあってよく切れる。

サーヴァントを揃えるために俺はあとどれだけ鍊金をしなければならぬのか。

等価交換エ……。

気を取り直して棚の整理でもしていこう。

ギルガメッシュから貰ってしまったソーマ……もったいなさすぎで飲めない。

デオン、マリーから貰ったワインとツマミの類……どうやら手作り

らしい。今夜ありがたく頂こう。……アンリ・サンソン変態が来ないことを祈って。

マタ・ハリから貰った小瓶の酒……ラベルはテキーラとなっているがどう考えても怪しい。ラベル剥がすか。……はい!! 規制品ですね!! 誰が媚薬なんぞ飲むか!!

畜生地雷見つけちまったよ……。

その名も《ジャンヌ印の海魔エキス100%濃縮エキス》冒澆味

瓶の中何かが蠢いている……。

〜そつとしておこう

最後にベッド周り。

さて……。

「ここにコン〇ーム山積みにしたやつ出てこい!! 今ならローマでキメラリレー10回やったら許してやるから!!」

マイルームには虚しい声が反響していた。

後日犯人はエミヤと判明した。本人曰く「責任が取れなくなると大変なことになる」だそうだ。遠い目をしながらロンドン……テムズ川……あかいあくま……アーサー……桜……等呟いていた。リレーには行かせた。

ふゆき

・《ふゆき その1》

すでに聖杯を回収してある特異点冬木に俺たちは来ていた。
やはり聖杯を全て集め人類史を修正しなければこの光景を変える
ことは出来ないのだろう。

「火、消えねえな」

「そうですね、マスター」

「……」

「……」

燃え盛る炎の中、何かを探すように必死に動きまわる影一つ。

それは某運命／＼の剣の主のように必死に炎の中を走り回っていた。
た。

「なあ、アーサー。アイツ置いてっていいか？」

「ぬわーっ!! 燃えてるッ燃えてますぞッ!! 日本のサブカルがツ萌
の文明が燃えてしまっていますぞッ!! 火イツ火を消さなければッ
!! 待っていてくださいされレミ○アちゃんフラ○ちゃん咲○様パチ○
リーちゃん小○魔ちゃん中国ちゃんーッッッ!!」
「あ、妖精メイドちゃんもイけませんぞ」

そう、煤にまみれ、欲にまみれ、煩惱にまみれた黒ひげのオッサン
が。

その光景を一緒に見ていたアーサー曰く、

「死ねばいいと思います」(ニッコリ)

……………デスヨネー

・《ふゆき その2》

冬木の町の一角、そこにある武家屋敷にエミヤとアーサー、俺は居た。

ここにもシャドウサーヴァントや魔物の類が湧いている。

黒ひげは置いてきた。

「エミヤ、お前はこの地に関わる英霊なんだってな。アーサーから聞いたよ」

「ああ、私はこの冬木の地に生まれ、聖杯の災いを受け、聖杯戦争にマスターとして、そしてアーチャーとして戦った。セイバーとはその頃の付き合いだ」

「そうか……」

エミヤは此処でないどこか遠い場所を見るような目で炎を見つめている。

今まで静かに佇んでいたアーサーがおもむろに口を開く。

「その頃のシロウは凜や桜やイリヤや大河や美綴と乳練り合ってフラグ建ててはスルーしてを繰り返して、ルートによっては周りに甚大な被害を出しながら愛を叫んでました。当然ながら私もその被害に遭いましたね」

「」

「」

「どうしました、マスター？」

「メメタア……。いや、どうしたんだアーサーそんなキャラじゃないだろ……。その…帽子…も…？ 帽子？ なんか格好もいつもと違ってないか、いや、その似合ってはいるんだが」

「ありがとうございますいますマスター。ちよつと着替えてきますね」

武家屋敷にさつきと向かってしまったアーサー。この状況で俺が言えることと言ったら……。

「エミヤエ………」

これだけである。

・《ふゆき その3》

服装のもどったアーサー、目が死んでるエミヤ、鬱憤を晴らすように槍を振るうクー・フリーンが影のサーヴァントを打ちのめしていた。

正直エミヤは自害せよアーチャーと言えば自害しそうなほどに死んでいる。

クー・フリーンは冬木にいるとほぼ毎回自害させられていたらしい。運の低いランサー達エ……。

その鬱憤を晴らすためこの冬木のフィールドで戦いまくって居るわけだが、所詮は影のサーヴァントと魔物。そんなに歯ごたえはなく満足できないらしい。

しかし数を倒しているだけあって即座に宝具を打つことが出来るほどに魔力が貯まる。

今度もまた槍が振るわれ——

「その心臓貫い受けるツ!! ゲイツボルグツ!!」

影のサーヴァントの心臓を貫い——

「なんだランサー、今作は当たるのか」

「なんだとテメェら!!」

アーサー↑セイバー。相性最悪。

エミヤ↑アーチャー。相性抜群。更にロー・アイアス無し。

「よし、覚悟はいいなアーチャー!!」

「すまん、待ってくれ!!」

◇ゲイツボルグツ!!

◇アーローツ!!?

エミヤってオチにしやすいよね……。

「……………エミヤエ……………」

ふゆきくその遺産く

・《○○じゃないから》

日頃思うことがある。

俺は男だ。そして、このカルデアにもサーヴァント含め男は多くいる。

その中でどうしてウチの女性陣はこんなに露出が多いのだろうか。眼福といえれば眼福なのだが、その度に一部サーヴァントが狩りにかかってくるのはやめていただきたい。

一人目：牛若丸

「おい牛若丸、その格好なんかならないか？ 正直目の毒なんだが」「これはパンツではなく禪なので恥ずかしくありませんね」

「いや、その上半身がry」

二人目：ステテン

「なあステテンノ、その格好なんかならないか？ 正直目の毒なんだが」

「下着だけれど美しいから恥ずかしくないわ」

「いや、それは問題——『問題無いわね？』ハイ、無いです女神サマー」

三人目：ジャック

「よおジャック、その格好なんかならないか？ 正直目の毒なんだが」

「パンツじゃないから恥ずかしくないもん！お母さん^{マスタ}」

「俺はお母さんじゃなくてお父さんな。お母さんはブーディカ。ほら、お母さんとこ行って服かえてきな。あと、ほら飴な。」

「ありがとうお父さん！ 行ってきまーす！」

「ああマジでジャック可愛い」（おう、いってらっしやい）

「…………」（あれ？ブーディカも服やばかった気が…………）

結論：ジャック可愛い。

Matrix・I『パンツじゃないから恥ずかしくないもん！』

・《世界修復く吸血のカーミラく》

「「「「「我らがズヴ○ズダーの光を、あまねく世界に!!!」」」」」
「カーミラ様に血を捧げろー!!」

「「「「「うおおおおおおおおお!!!」」」」」

「いや、あんさんら何やつとんの?」

食堂に溢れかえる黒服ガスマスク。これ、カルデア職員なんだぜ?

そして……

「いや、マジで何やってんの!?!」

眼帯つけたスカサハ「……………」

機械の上に座っているジャンヌ「……………」

軍服着たチャールズ・バベツジ「……………」

青い装甲を増したフランケン「……………」

ガスマスク着けたハサン「……………」

ガスマスク着けたロマニ「……………」

いつも通りのカーミラ「……………」

カオスである。とりあえずウチの主力とロマニ仕事しろ。

「ロリじゃないヴェニエイラ様とかwwwwウツへあwwww」

「んんwwwwむしろ露出減ったスカサハ姐さんwwww」

「ああジャンヌ……。結末が恥辱と憎悪に染められどんなに貶められたとしても、あの日の記憶は、過ぎし日の栄光だけは、私の胸の内に刻まれていた。いかなる神にも運命にも奪えない、穢されない、あの光だけは——」

「あえて触れない方針で」

「フランちゃん結婚してkうわ何をs」

「ハサン先生片付けよろしくお願いしやーすwwww」

「おい主任仕事しろよ」

……………お前ら仕事しろ。

Matrix・II 『某アニメのコスプレ』

・《魔法少女》

「マスター、お願いがあります」

「ん？ どうしたリリイ」

今回のカルデアの事態の現況を探す最中に本を持ったメディアリリイに声をかけられた。

いつも控えめなりリリイがお願いごとというのも珍しい。

できれば叶えてあげたいところだ。

「イアソン様を喚んで下さい。ぶち殺しますから」

「フアツ!? ハイちよつと待ったリリイサン何言ってるの？」

目に光がない……のはほぼデフォルトとして、心なしか少し顔が青くなり、影を背負っているように見える。「だが、それが良い」などというフレンドの妄言は知らん。

とりあえず意味がわからないので聞いてみたところ

「イアソン様のような心が酷い男に捕まった魔法少女は大抵ひどい目に遭ってしまいます……そう、エロ同人誌みたいに、エロ同人誌みたいにつっ!!」

そんなエロ同人誌みたいに p i i で p i i で p i i な目になんて遭いたくありません!!」

その台詞と共に床にぶちまけられる薄い本。

『く触手の狂宴く魔法少女の○辱』

『洗脳!!魔法少女○○』

『NTR幼い魔法少女』 等々……

(ちなみに筆者はこういう系統あまり読みません)

なんなん (白目)。

「アノ……リリイサン、こちらどちらで手に入れました？」

「ダ・ヴィンチ工房と黒ひげさんからです。デュフフって言いながら」
「……………」

M a t r i x ・Ⅲ ダ・ヴィンチ工房、黒ひげ (知ってた) からの
薄い本

なんか焼けた冬木から変なモン持ち込んだ鯖やそれを複製した鯖

がいたらしい。

話を聞けばその鯖達は折檻を受けたそうだ。

現場を観てみると、サンドバックに吊るされ、延々と男筋バサカ勢肉の相手を強制的にさせられる黒ヒゲと、工房を喜々として焼き討ちにされるダ・ヴィンチちゃんの姿があった。

俺はスパルタクスに「同士よ!! 弱き子どもに圧政(アウトな性教育)を与えた黒ひげに反逆を!!」と言ったり、ノツブに「教育上悪いからしようがないネ、是非もなし」とそつと茶器を差し出しただけなのだ。

天罰って下るもんだなあ(他人面)

後日、R-18の百合本を持ったナーサリーが居たので再執行しました。

…

パパラッチ、それは秘密を写すもの。

パパラッチ、それは時にストーリーカーとなる。

パパラッチ、それはイツテQの出川イングリッシュの宝庫。

……いや、最期はどうでもいい。

まあ、秘密を探るものということだ。

マスターとしてはサーヴァントの一人が趣味でパパラッチ……カメラをやっていてそこからくる情報があり、パパラ……カメラを趣味とする人に害意はない。

そう今回はそんなパパ……面倒なのでパパラッチからの写真提供があつた。

おもしろ……ゲフンゲフン、マスターとして仕事をしなければ。

・〈文明は壊す?〉

此処に有りますは一枚の写真。あるの人物の問題の写真である。

ターゲットは〈アルテラ〉……偉大なるフンヌの王だ。

エクステラによるモーション変更とボイス追加期待してます。

「さて……アルテラ。この写真、なにかこれに関して言うことはないかな?」

そこに写っているのは今、尋問室と化している冷房ガンガンのアルテラの私室と、三色になったアイスを食べながらベッドでゴロゴロしているアルテラ。

文明を破壊する、とは何だったのか。

「文明を破壊しないことか。……いや、エアコンは文明ではない。故に私はお前が文明と言いたそうな顔をしているエアコンを破壊しない」

「ほう、その心は?」

「エアコンは機械、そして私も機械だ。……つまりエアコンは機械では無く同族だ」

……それでいいのかフンヌの王。だがしかし まだ問題点はあ

る。

「アイスのことか、アレも文明ではない。……故に私はお前が食文化だろと言った言葉を聞かず、破壊しない」

「ほう、その心は？」

「このアイスは三色、そして私の持つ剣は三色。……つまりアイスは食文化ではなくマルスのものだ」

「おっおう」

……それでいいのかフンヌの王。ま、まだ問題はあ

「それは、この写真端に写っている服のことか？」

「そうそう」

「この服は文明ではない。……故に私はお前が衣文化だろと苦笑いしたのを見なかったことにし、破壊しない」

「ほう、その心は？」

「この服は神が定めたもの、追加ダウンロードコンテンツにあるだろうものだ。……言い訳するまでもなく、文化云々の前に神が定めたものだ」

「そうか」

……それでいいのかフンヌの王。神はきつとマルスでは無い上に金を心待ちにしているでしょう。知ってます。買います。それが助けになるのなら（いちユーザー感）。

「で、アルテラ。君の未来にあるこの文明はどうだ？ 外は確かに滅びてしまっている。だけど、こんな小さな施設にもいくつも文明を感じられるだろう」

「う、うむ。此処には確かに多く文明がある。私は文明を破壊する、これまでも、これから。しかし——」

「それでも君は俺に協力して、本来あったはずの文明を取り戻してくれるんだろう？ ありがとう。この文明を未来を好きになってくれてありがとう、エツエル」

「……うん」

アルテラは褐色かわいい（確信・核心）

・〈写真〉

「いつも協力ありがとう、ゲオルギウス」

「いえいえ、私の趣味がマスターのためになるのなら、喜ばしい限りです」

俺のマイルームの壁には多くの写真が貼られている。それはあまりにも数が多くて、大半がアルバムにしまわれているけれども。それでも自分と仲間との時間を写していった思い出として大切にしている。

今、壁には無人島からレイシフトした直後の『機械に囲まれた水着姿のサーヴァントと俺』、波長があったのだろうか、俺に絡みながら楽しそうに『酒盛りをする酒呑、荊軻、ドレイク』、騎士に囲まれ俺を庇いながら戦う『背中合わせのオジマンディアスとギルガメッシュ』、全員集合で思わずやってしまった『アーサー顔達の集合写真』などがある。

どれも楽しい思い出であったし、中には辛いものがあったが、それも今経験として俺の中に生きている。

この写真たちはそれを形にしたようなものだ。

「あと……聖杯は一つ」

俺はそつと先ほど一枚増えた写真を見た。